あたらしい「音」を求め続けた作曲家

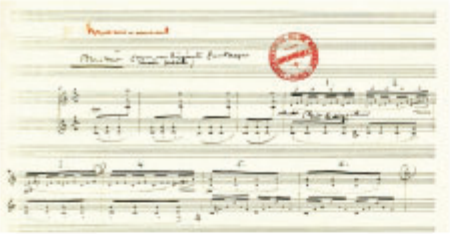
大阪芸術大学図書館所蔵品展
平成30年11月19日～12月25日
図書館4階展示コーナー

クロード・ドビュッシー没後100年

本年はクロード・ドビュッシー（1862～1918）の没後100年にあたる。彼の音楽から発せられる新しい「音」は、それを聴く者にとって今まで味わったことの無い、独特な音響の世界を体験させた。ピアノの手ほどきを受け、わずか10歳でパリ音楽院に入学を許可されたが、作曲家としては、マラルメの詩に基づく管弦楽曲《牧神の午後への前奏曲》（1894）、メーテルリンクの戯曲によるオペラ《ペレアスとメリザンド》（1902初演）などで成功を収めるまで多くの時間を要した。ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメなどの詩はドビュッシーの多くの素晴らしい旋律の源となり、彼がパリで開かれた万国博覧会などで目にした日本の美術品や絵画、万国博公式コンサートで耳にした諸外国の音楽などは創作の糧になったであろう。また1900年のパリ万国博では彼の作品も演奏されている。ドビュッシーの音楽が持つ独特な「音」は、その後の音楽に国やジャンルを超えて大きな影響を与え続けている。

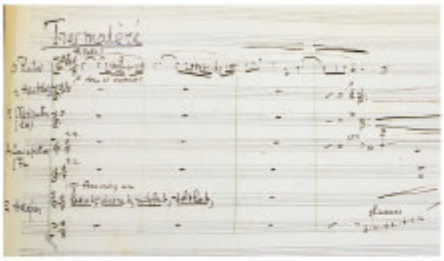
展示では、ドビュッシーの筆跡や推敲のプロセスが見られる自筆楽譜のファクシミリや、彼の音楽に影響を与えた画家たちの作品を紹介する。

ドビュッシーは多くの絵画を知っていた。彼自身「私は音楽とほぼ同じくらい絵が好きなのです」と語っていて、《映像》などを作曲しただけでなく、何枚かデッサンも描いている。《映像》は印象主義的な作品であり繊細な音色の変化で気分や雰囲気を描くことに特徴がある。



←《展示楽譜》
《映像》第1集の中から「運動」　自筆ファクシミリ

マラルメの依頼により作曲した「牧神の午後への前奏曲」。この作品はその後舞踊家ニジンスキーによって振り付けられ革新的なバレエ作品となる。



←《展示楽譜》
《牧神の午後への前奏曲》　自筆ファクシミリ

演奏会：「ドビュッシー」記念コンサート（芸術情報センター6階ロビー　12：40開演）

①11月29日（木）　歌曲独唱：磯本龍成、大原陽羽、河村未紀、本荘沙耶香
②12月4日（火）　フルート演奏：福永吉宏先生、喜瀬麻弥、木下茉冬、三枝澪奈
③12月11日（火）　ピアノ連弾：高久理恵先生・遠藤玲子先生
④12月13日（木）　ピアノ連弾：仲道祐子先生・今川裕代先生

（展示構成・テキスト：芹澤秀近　大阪芸術大学音楽学科教授）